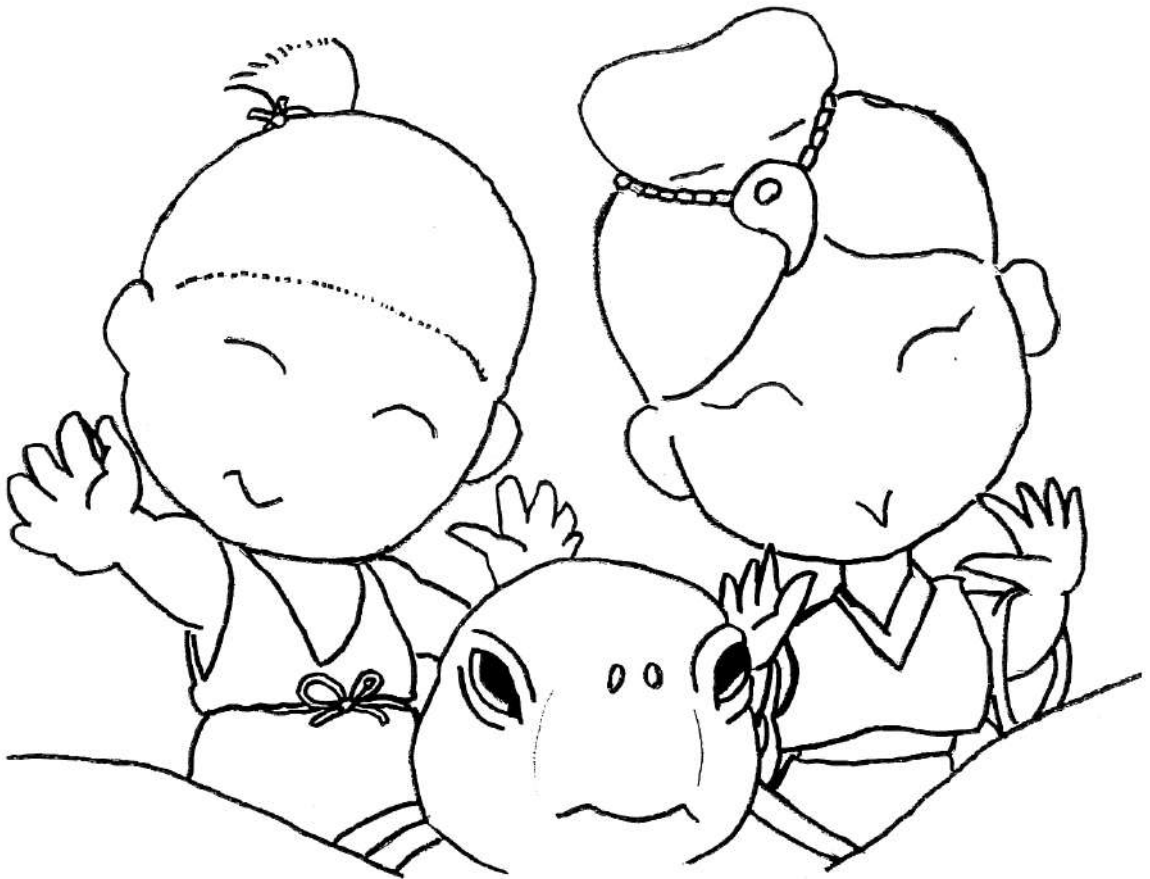




Marine Turtler

マリンタートラ

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌
第21号





表紙の絵 速水敏郎様

今号の表紙の絵は神奈川県にお住まいの速水敏郎様のイラストです。横浜市の神奈川区にはちょっとユニークな浦島伝説があるそうです。太郎は竜宮城から観音様の仏像をもらってきますが、玉手箱を開けることはなかったようで、そのあと乙姫様が迎えに来て竜宮城へ帰っていったそうです。その後も時々夫婦そろって、神奈川の海に里帰りして来るそうです。めでたしめでたしですね。かわいいイラストとお話しをありがとうございました。

表紙の絵を募集しています！

皆様から表紙の絵を大募集しています。可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方は、ぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

- サイズ：B5
- 色：自由。（仕上がりはモノクロになります。）
- 期限：×切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、お早めをお願いします。
- 応募方法：大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。
- 送付先：〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
日本ウミガメ協議会 マリントートル編集部
※メールの場合は info@umigame.org まで
件名に「マリントートル表紙」と明記の上お送り下さい。

会報の名称マリントートル(Marine Turtler)は、英和辞書には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きの人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリントートルと呼ぶことを提唱したいと思います。

Marine
Turtler

Contents

ウミガメ基礎講座 20	3P
「水陸両用のアスリート」 岡本 慶	
ウミガメの民俗 14	5P
「大分県のウミガメの民俗」 藤井 弘章	
第26回日本ウミガメ会議inいちのみや千葉を終えて 渡部 明美	8P
第27回日本ウミガメ会議 室戸会議のご案内	9P
ウミガメ協議会の主な事業	10P
平成26年度収支計算書	11P
各地からの報告	
事故死した母ガメの卵 人工孵化と放流 河津 勲	12P
カワリモノ 高知県 浜の亀ラマン 溝渕 幸三	13P
三重大学ウミガメ・スナメリ調査保全サークル「かめっぷり」活動紹介	
喜多 晃平	15P
沖縄カメ宴会 若月 元樹	16P
インターンシップ報告 藤田 健登 & ご寄付を頂いた方々	17P
うみがめニュースレター & Seaturtle goods shop	18P
STSmembers募集中! & STSmembers更新手続きについて	19P
編集後記	

「水陸両用のアスリート」

国立研究開発法人水産総合研究センター 国際水産資源研究所 岡本 慶

ウミガメは爬虫類ですが、水中にも陸上にも見事に適応して暮らしています。爬虫類では珍しく、と書こうとして、ふと考えてみたら、水棲ガメ、ワニ、ヘビ、ウミイグアナ・・・と意外に多いことに気付かされました。もしかすると、逆に水陸両性でないものの方が珍しいかもしれません。話を元に戻しますが、水陸両方で生活を送る上で非常に重要な役割を果たしている体の部位のひとつに、ヒレ状をした四肢があります。ウミガメ類の前肢は後肢と比較して細長く、甲長に対する前肢の長さは、オサガメでは半分以上にもなります。

水中での暮らしにおいて手足をもっともよく使うのは泳ぐときです。生活史の大半を水中で送るウミガメの前肢は泳ぐのに非常に適した形状で、適度にしなるようになっています。これで水を捕らえ、推進力を生むのです。このしなりの秘密は、そのヒレの中にあります。外見からは、一つの大きなかたまりのように見えますが、実は中には五本の指があり、私たちヒトと同様に関節によって各指3~4本の骨がつながっています。これが複雑な動きを可能にしているのです。

ウミガメの生活史のはじまりが陸上で、すべてのウミガメは、卵から孵化し砂の中から地上に出ると、すぐに歩くことを強いられているのです。しかも全速力で、です。この際、一目散に海に向かわなければ、鳥やカニ、獣などの外敵に襲われかねません。やっとの思いで海に入ると、今度は急いで沖に向かうために、前肢を羽ばたかせるように活発に動かし、全力で泳がねばなりません。生まれた直後からいきなりトライアスロンをしているようなものです。

海に入ったウミガメが次に陸を訪れるのは、ハワイなど一部地域で甲羅干しのために上陸するアオウミガメを除き、産卵のために砂浜に上陸する時です。後肢が役に立つのは、まさに、この産卵のときです。産卵する場所を決めたメスは、後肢を使って

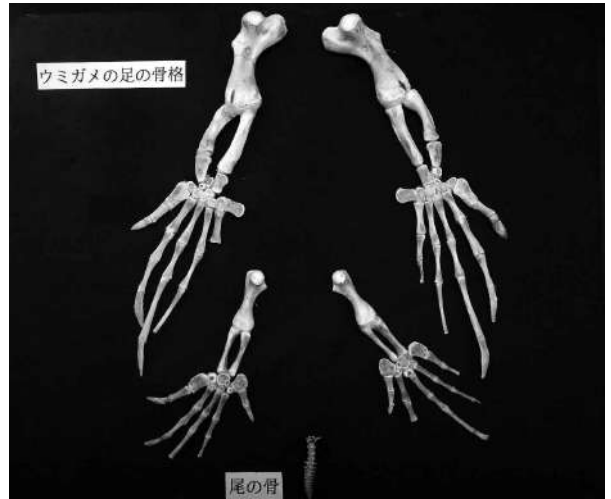
穴を掘っていきますが、この際、ショベルカーのバケットのように曲げながら、巧みに砂をすくって穴の外に出していくのです。その光景は器用というほかに言葉が見当たりません。産卵を終えた後、砂をかけて産卵巣の場所をわからないようにしますが、このときには前肢を一生懸命動かして砂を飛ばします。

このように前と後肢のすべてが彼らの水陸両性生活に適応しています。しかし、この自然に適応した四肢は見た目以上に複雑なようです。そのことを裏付けたのが、悠ちゃんプロジェクトです。両前肢をサメに噛み切られて保護されたアカウミガメの「悠ちゃん」に義肢をつけようと発足したこのプロジェクトでは、義肢製作、行動解析、生地製作、幸福度分析などの専門家が集まって、失われた前肢を補う義肢を作るために奮闘しました。しかし、想像以上に苦戦し、納得のいくものができるまで5年の歳月を要しました。

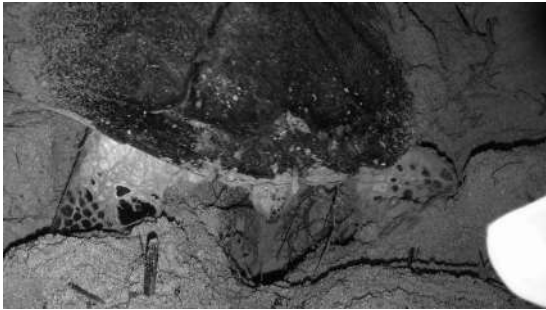
悠ちゃんが経験したように自然界を無事に生き抜くのは至難の業とはいえ、生まれながらに走り、泳げる四肢を持つウミガメはうらやましい存在に思えて仕方ありません。



アオウミガメは前肢をつかって羽ばたくように泳ぐ



ウミガメの足の骨格



後の足で産卵する穴を掘る



義足をつけて泳ぐ悠ちゃん

大分県のウミガメの民俗

近畿大学文芸学部文化・歴史学科 藤井 弘章

全国的にみれば、九州地方にはウミガメを供養する事例は多くありません。そのなかで、大分県ではウミガメの墓が7つ確認されています。しかも、すべて臼杵湾の周辺に集中しています。これから、どのような背景が考えられるでしょうか。また、大分県にはほかにどのようなウミガメに関する民俗が存在していたのでしょうか。今回は、大分県におけるウミガメの民俗について、臼杵市と佐伯市の調査をもとにご紹介したいと思います。

大分県臼杵市には柿之浦に1つ、鳴川に1つ、臼杵に1つ、中津浦に3つ、ウミガメの墓があります。さらに、臼杵湾の入り口に当たる、大分市佐賀関にもウミガメの墓が1つあります。このうち、古いウミガメの墓として臼杵のフジジンという醤油会社敷地の「壺亀之塔」があります(写真1)。明治32年(1899)の建立です。臼杵川に迷い込んだウミガメがまもなく死んだので、当時の社長が建てたということです。柿之浦の墓も明治30年代のもので、鳴川の墓は大正10年代です。浜に打ち上げられた大きなウミガメを、集落の人が山の上に担ぎ上げて墓を作っています。したがって、浜から離れた小高い山の上に墓があります。中津浦には3つの墓がありますが、いずれも昭和になってからのものです。中津浦で最も古い墓は、昭和23～24年(1948～50)に建てられたものです。定置網にかかったタイマイを祀ったということです。平成2年(1990)に「亀徳霊神」と刻んだ石塔を立て直して祀っています(写真2)。これは元網元の家に祀っています。中津浦のあとの2つは、地区の恵比須神社境内にあります。1つは昭和43年(1968)(写真3)、もうひとつは昭和61年(1986)の建立です。いずれも、「亀之墓」と刻まれており、ウミガメが網に入ったため、漁師個人が建てたものです。大分市佐賀関の墓は、早吸日女神社の境内にあります。この神社は地元でも有名な大きな神社です。カメ形の石造物の上に、「大亀碑」と書かれた石碑が載っています。昭和42年(1967)に地元の漁師が建てたものです(写真4)。このように、臼杵市周辺のウミガメの墓をみると、いずれも明治以降に建てられたものばかりです。また、すべて石塔型の墓となっています。

ウミガメの墓を作るのは、定置網などの網にカメが入って死んでいたときです。臼杵市では、ウミガメ

が網に入って生きていれば、カメに酒を飲ませて海に放すといえます。臼杵市や大分市佐賀関では、遠洋漁業などの際に、ほかの地域の漁師がウミガメを食べるのを見た、という方もいます。ウミガメを食べる、ウミガメの肉はうまいらしい、という話を知っている方は何人もいるのですが、臼杵市周辺ではウミガメを食べた、ということはないようです。また、臼杵市周辺では半島の先で、たまに産卵があるといいますが、上陸・産卵は珍しいようです。したがって、卵を食べるという習慣もなかったようです。ところで、戦国時代に大友氏の居城でもあった臼杵城は別名「亀城」と呼ばれていました。その突端は海中に突出した岩で、「亀の首」と呼ばれていたそうです。敵が攻めてきた時は、城を乗せて沖へ逃げる、といわれていたそうです。このような言い伝えは、臼杵周辺にウミガメの墓を作らせる背景になったと思われる。ただし、昭和40年ごろの埋め立て工事により、「亀の首」は取り壊されて、臼杵城周辺は埋め立てられています。また、臼杵市内の古くからある薬局では、ウミガメの甲羅が看板代わりに使われています(写真5)。漢方薬としてウミガメの甲羅が使われた名残ではないかと思われる。

大分県南部の佐伯市でもウミガメのことを聞きました。ところが、佐伯市の方々はウミガメの墓は聞いたことがない、といえます。佐伯市でも、網などに入ったウミガメが生きていれば酒を飲ませて放すといえます。これだけで考えると、臼杵市よりも佐伯市のほうが、ウミガメとのかかわりは少ないように思います。しかし、佐伯市ではウミガメの産卵する砂浜が多数あります。大分県全体でみても、佐伯市などの南部のほうにウミガメの産卵や定置網への混獲が多いようです。したがって、ウミガメとの接触率は、臼杵市よりも佐伯市のほうが多いと思われる。

佐伯市のなかでもウミガメの産卵が多いのは南部の旧蒲江町です。旧蒲江町で60歳以上の方に話を聞くと、ウミガメの卵は食べた、といえます。それだけウミガメの産卵は普通のことだったのでしょう。ところが、同じ佐伯市でも、旧蒲江町より北に位置する旧米水津(よのうづ)村では、ウミガメの卵を食べたという話はあまりありません。旧米水津村の間越(はざこ)には現在、はざこネーチャーセンター



写真1 臼杵のウミガメ墓



写真2 元網元の家のウミガメ墓



写真3 恵比須神社境内のウミガメ墓



写真4 早吸日女神社境内のウミガメの墓



写真5 薬局の表に飾られたウミガメの甲羅

があり、ウミガメの保護にかかわっています。間越の住民の方にかがうと、昭和40年ごろまでは綺麗な砂浜だったので、毎年何頭もウミガメが上がったといいます。その後、離岸堤などを作ったために砂浜が荒れ、ウミガメの産卵もみられなくなりましたが、4・5年前にウミガメが産卵したことをきっかけにして、現在のようにネイチャーセンターができるまでになったということです。間越の昭和10年生まれの方にかがうと、「今年はずっと上の方に産卵するから大波がつくぞ」、とか、「産卵が下の場合は、波があんまりつかんじゃろう」、などといったそうです。南西諸島などでよく聞く、ウミガメの産卵場でその年の波の大きさを予知する民俗知識です。間越では、「カメは龍宮の使いじゃ」といって、定置網などに入った場合は逃がしたといいます。このように、同じ佐伯市でも旧蒲江町では卵を食べますが、旧米水津村では信仰的な意味合いもあるようです。しかし、ウミガメの墓はありません。

このようにみえてくると、臼杵市にウミガメの墓が多いのは、ひとつにはウミガメの回遊や産卵に限られているため、という理由が考えられます。全国的にみても、産卵や回遊が多い地域では、ウミガメや卵を食べる習慣がみられました。ところが、ウミガメが珍しい東北地方などではウミガメは縁起物として祀られる場合が多いです。大分県内のウミガメの民俗は、佐伯市南部の旧蒲江町では卵を食べていましたが、佐伯市中部の旧米水津村では卵は食べずに信仰的な色彩があり、さらに北側の臼杵市ではウミガメの墓が多い、というウミガメの生態的な特徴に影響を受けていることは間違いありません。そのように考えると、さらに北側の国東半島などでは、臼杵のようなウミガメの墓がたくさんないといけなことになります。しかし、今のところ、国東半島ではウミガメの墓は報告されていません。臼杵市周辺にウミガメの墓が多いのは、先ほど述べたように、臼杵城が亀城と呼ばれていたような、カメにまつわる伝説があったことにも影響を受けているようです。さらにさかのぼると、神武東征神話において海中から神を乗せたカメが現れたのも豊後水道でした。このような、神話や伝説をもとに、臼杵周辺にはウミガメが死んでいると埋葬して供養するという習俗が発達したと思われる。

臼杵周辺ではクジラを供養する習俗も多数みられます。臼杵市には7つものクジラの墓があります。ちなみに、大分県では佐伯市に2つ、大分市に1つ、豊後高田市に1つあります。臼杵市にクジラの墓が多いことが分かります。全国的にみても、クジラの墓が集中する地域になっています。臼杵のクジラの墓は、幕末に建てられたという「鯨地蔵」もありま

すが、はっきりした年代が分かるのは、臼杵市大泊にある「大鯨魚宝塔」です。これは明治4年(1871)に建てられました。臼杵は捕鯨地域ではありません。積極的にクジラを捕獲する地域ではなかったのです。ただし、浜に打ち上がってきたクジラを捕獲して食用にしたり、肉を販売したりすることはありました。臼杵のクジラの墓には、利用したクジラだけでなく、漂着して死んだクジラを供養したものもあります。このほか、臼杵市にはカニ・アワビ・サザエ・ナマコなど、さまざまな海産物の供養塔も多数みられます。つまり、臼杵市はクジラをはじめ、海洋生物の供養塔が多数存在する地域なのです。ウミガメの墓も、このようなクジラなどの供養習俗に影響を受けて始まったと考えられます。

以上のように、大分県には佐伯市南部にはウミガメの卵を食用とする地域もありましたが、臼杵市ではウミガメの墓が多数みられました。こうした地域差の背景には、ウミガメとの接触頻度、神話や伝説、他の海洋生物の供養習俗などが影響していると考えられます。大分県のウミガメの民俗については、『民俗文化』28号(近畿大学民俗学研究所、2016年発行予定)に詳しく紹介する予定です。写真はいずれも筆者が2005年3月に撮影したものです。

第26回日本ウミガメ会議inいちのみや千葉 を終えて

一宮ウミガメを見守る会 渡部 明美

第26回日本ウミガメ会議inいちのみや千葉にご参加いただき本当にありがとうございました。関東以北で初の開催でしたが、たくさんの方が一宮町に来て下さったことを嬉しく思っています。

砂浜観察会は2コースにしました。1つは全国共通の方法で砂浜の生きものを調べる「砂浜海岸生きもの調査」で、生きもの図鑑を作成しました。この日は30種類ほどの生きものを記録できました(ちょっと少なめ、普段は50種類くらい)。2つ目は、船で海から南九十九里浜を観察する洋上観察です。青空の下、強風と波しぶきと寒さはありませんでしたが、スナメリが姿を見せ、参加者のみなさんを歓迎してくれました。

開会式の後の記念講演は、一宮ウミガメを見守る会の顧問でもある九十九里浜自然誌博物館の秋山章男氏が『南九十九里一宮・渚の自然を探って40年』と題して一宮町の豊かな自然について、自身で歩いて記録したたくさんの写真パネルを展示して、クイズも取り入れながらの楽しく学べるスタイルの素晴らしい講演会でした。

今回は地元 千葉県のウミガメ関係者から報告枠を設けました。一宮町の中学生3人が夏休みに続けているアカウミガメ調査についての発表もありました。北限の産卵地の特徴を発表した内容が多く、多くの参加者たちから、こんなに首都に近く寒い地域にも毎年アカウミガメの産卵があること、またウミガメの漂着が多いことをあらためて知り、驚いたとの話がありました。

本会議は、千葉県がウミガメのふる里であることを多くの人に知ってもらい、後継者を育成することも目的としました。そのために地元 中村氏の写真展、デコパージュ作り、鴨川シーワールドの出張ウミガメ展などのイベントも企画しました。その結果、3日間で1200人以上が参加し、たくさんの方に千葉の自然とウミガメを知って頂けたと思っています。

一宮町での開催が決まってから、とても忙しく様々なことがありましたが、多くの方々のご支援とご協力で会議を開催することができました、本当にありがとうございました。大変勉強になり大きく成長させてもらった1年間でした。奄美大島の興さんから引き継いだ『日本ウミガメ会議』を無事終えて、ホッとしています。配慮の足りなかったところもあるかと思います。参加者のみなさんが今回の日本ウミガメ会議をどう思ったか気になっています。ぜひ、次回の室戸会議でまたお会いした時にでもお聞かせ下さい。



第 27 回日本ウミガメ会議 室戸会議のご案内



第 27 回目を迎える日本ウミガメ会議は、高知県室戸市で開催されます。年に一度開催される日本ウミガメ会議では、各地から調査・研究に携わる人々、見守る人々が一堂に集まり、産卵状況等の報告はもちろん、ウミガメの未来や自然環境についても話しあっています。

今回の開催地である室戸市では、日本ウミガメ協議会室戸基地が地域の漁業者と協力し、漁業によって誤って捕獲されるウミガメ類を調査する活動を 14 年間行ってきました。その数はこれまでに 3400 頭にも及んでいます。その中には、ウミガメ関係者の憧れであるオサガメの確認例が何度もあります。また、ウミガメだけではなく、多種多様な魚類、今話題の深海魚、大型の鯨類も観察することができます。これらウミガメを始めとする海洋生物の調査には漁師さんの協力が不可欠です。室戸の漁師さんはなんといっても豪傑ぞろいで、お酒に強いです。お酒の席で披露される武勇伝には驚くような生き物が登場することもあります。美味しい魚とお酒を堪能しながら、海の男の話に耳を傾けるのはいかがでしょうか。ぜひ、皆さまお誘いあわせの上、ご参加ください！



- ◆第 27 回日本ウミガメ会議 室戸会議
- ◆期間：2016 年 12 月
- ◆参加資格：ウミガメに興味がある人や自然が大好きな人

※会議詳細は随時当会ホームページにて更新します。 <http://www.umigame.org>

●大阪事務局

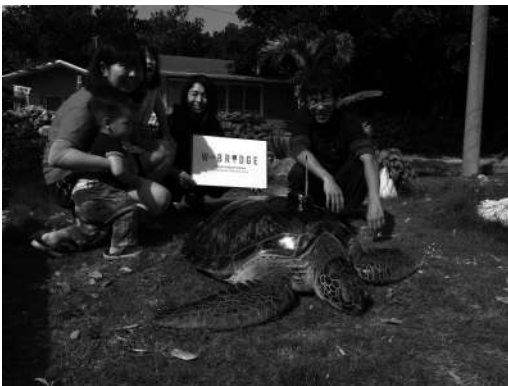
1. 日本におけるウミガメ関連情報のとりまとめ:2015年の日本のウミガメ上陸産卵・漂着・混獲情報の収集・とりまとめ(上陸・産卵 約8700回・4900回、漂着 約270件、混獲 約720件)、第26回日本ウミガメ会議 in いちのみや千葉(3日間で述べ1,200名参加)
2. 委託助成事業:平成25年度徳島県自然環境協力員育成業務(水辺環境)、環境省モニタリングサイト1000ウミガメ調査、アースウォッチジャパン 種子島のウミガメ調査/みなべ町教育委員会 ウミガメ保護調査、ライオン大阪工場 ウミガメ保全活動の企画・運営準備、米国西部太平洋区漁業管理評議会と論文を共同執筆/在日米軍基地内におけるウミガメ卵の保護活動
3. 普及啓発活動:損保ジャパンCSOラーニングインターン受入、大阪経済大学 ボランティア論/帝京科学大、岡山理科大実習受け入れ など

●付属 黒島研究所

1. 調査研究:ウミガメ類の上陸・産卵調査(主に 黒島西の浜・西表島ウブ浜・サザレ浜)ウミガメ類の標識放流調査(2015年は約110個体を標識放流)
2. 委託事業:W-bridge project ウミガメの生態調査を通じた自然環境保全への啓発、那覇青果市場 沖縄島の人工海浜におけるウミガメ上陸産卵調査、環境省 崎山湾網取湾自然環境保全地域におけるウミガメ生息状況調査、環境省 西表石垣国立公園黒島海岸漂着ゴミ清掃業務、沖縄環境調査株式会社 石垣島新空港のウミガメ産卵調査
3. 普及啓発:黒島研究所入館者 9988名(2015年)、研修生の受け入れ46名、ウミガメ勉強会年5期間 約1000名参加、ウミガメニュースレター発行補助、ウミガメ速報の配信 など

●室戸基地の活動

1. 調査研究:ウミガメ類の上陸産卵調査(室戸市周辺)、定置網で混獲されるウミガメ類の標識放流調査(室戸市椎名、三津、高岡漁港、のべ190個体を標識放流)
2. 普及啓発:研修生の受け入れ1名、施設見学受け入れ40名、四国の各種イベントにおいてブースを展開 7回、ウミガメ勉強会・出前授業開催 約200名参加
3. そのほか
鹿児島県野間池におけるウミガメ類の混獲調査補助



平成26年度 特定非営利活動事業収支計算書

特定非営利活動法人 日本ウミガメ協議会
自：平成26年10月1日 至：平成27年9月30日

(単位:円)

科目		金額	
I 収入の部			
1.会費収入		935,496	
2.事業収入			935,496
(1) ウミガメ類を取り巻く自然環境の保全に関わる事業			
助成金・事業委託費・事業収入		990,000	
小計			990,000
(2) ウミガメ研究・保護活動の発展および育成に関する事業			
助成金・事業委託費・事業収入		24,365,532	
寄付金収入		1,274,329	
小計			25,639,861
(3) 日本ウミガメ会議の開催に関する事業			
会議開催協賛金・会議参加費・補助金・その他収入		8,906,541	
小計			8,906,541
(4) 会員および関係団体との相互連絡と情報の収集および提供に関する事業			
事業委託費		9,979,200	
小計			9,979,200
(5) 情報誌の作成に関する事業			
助成金		7,000,000	
小計			7,000,000
3.雑収入	受取利息 為替差益	833 208,293	
4.その他の収入		13,842,299	
			13,842,299
収入の部合計			67,502,523
II 支出の部			
1.事業費			
(1) ウミガメ類を取り巻く自然環境の保全に関わる事業			
事業費		263,110	
人件費			263,110
(2) ウミガメ研究・保護活動の発展および育成に関する事業			
事業費		17,696,530	
人件費			17,696,530
(3) 日本ウミガメ会議の開催に関する事業			
事業費		5,325,825	
(4) 会員および関係団体との相互連絡と情報の収集および提供に関する事業			
平成26年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業(ウミガメ調査 関係団体との相互連絡と情報の収集および提供)		954,579 196,758	
小計			1,151,337
(5) 情報誌の作成に関する事業			
日本のアカウミガメの上陸産卵状況のとりまとめ(NF/WF助成) うみがめニュースレターの発行支援		700,342 111,446	
小計			811,788
2.その他の支出	経費 人件費	7,427,180	
小計			7,427,180
3.管理費	人件費 その他管理費	19,945,636 10,772,394	
小計			30,718,030
支出の部合計			63,393,800
当期収支差額			4,108,723
前期繰越収支差額			7,896,945
次期繰越収支差額			12,005,668

全国で活躍しているマリントートルの近況をお伝えします!

事故死した母ガメの卵 人工孵化と放流

(一財) 沖縄美ら島財団 総合研究センター 河津 勲

2015年8月16日の夜間、産卵のために沖縄県大宜味村喜如嘉の砂浜に上陸してきたアオウミガメが、砂浜の背後の車道で乗用車にひかれて死亡するという悲しい事故がありました。夜中の11時を過ぎた頃、日本ウミガメ協議会会員の米須邦雄さんから、「アオが車にひかれた」と連絡があり、早急に現地に赴きました。連絡から約一時間後に現地に到着すると、アオウミガメはもうすでに死亡していました。背甲が裂けてそこから内臓の一部が飛び出すなど無残な姿でしたが、我々が到着する直前までは生きていたようです。

このウミガメの歩行痕跡をたどると、上陸後にまっすぐ進み、産卵を終える前に植生と植生の間隙から車道に侵入したことが判明しました。これは産み落とされるはずであった卵が、未だ母ガメのお腹の中にあることを意味します。お腹の中の卵に損傷がなければふ化する可能性があるかと予想し、母ガメの死体を総合研究センターに持ち帰り、解剖することとしました。まず、腹甲板をはずすと、複数の卵がみつかりました。さらに解剖を進めると、対になった卵管内に合計80個の卵がみつかり、全て無事に摘出することができました。これらの卵は振動を与えないように注意しながら、真水で洗浄したのち、ふ卵器（ふ化させる機械）内に收容し、気温約29℃一定（雄と雌が同じ割合になる臨界温度）、湿度90%以上という条件下で、人工孵化を試みました。



卵の摘出から54日後にあたる10月10日にピップ（殻を破る行為）が確認されはじめ、58日後の10月14日までに計20個体の子ガメがふ化しました。これらの子ガメがフレンジー（興奮期）になったことを確認し、母親が事故にあった喜如嘉の砂浜から夜間に放流しました。つまり、子ガメたちは生まれるはずであった砂浜から海へ旅立っていったのです。

世界的に見ても珍しい、体内から摘出した卵の人工ふ化に成功し、さらに放流できたことは喜ばしいことですが、本当に重要なことはウミガメが安心して産卵できるような砂浜環境を保全することではないでしょうか。今回の事故を教訓に、交通量の多い道路と砂浜が直接つながっているような場所すべてにおいて、ウミガメが道路に侵入できないような対策が行われることを期待したいと考えています。



カワリモノ

高知県 浜の亀ラマン 溝淵幸三

ここ最近の6年程からいろいろ変わった事が増えてきている。その事例を毎年200ページほど書き留めている観察日記から抜き出してみる。

まず、親ガメの足跡だが、腹甲のコスレが残らないものが観られるようになった。この足跡は砂の細かい平野と双海では顕著にわかる。足跡の残り方は、砂が多いか少ないか、湿っているかそうでないか、粒子で変わるが、少なくとも以前はどこの砂浜でもみられなかった。

このような足跡を残す親ガメは、産んだ卵から必ずと言っていいほど、普通のアカウミガメとは異なる腹甲の白いもの、喉元の白いもの、甲らが小判形のもの、肋甲板

4枚のものなどが出てくる。このようなカワリモノの子ガメの出現率は20～30%になる。産卵巣によっては、ふ化した子ガメのほとんどがカワリモノである。さらに、足跡の変わった母ガメの産んだ卵は、ふ化率が極端に悪い。卵数は140～150個と多いのに、ふ化するのはずか5～7匹くらいが多い。しかも、

とても弱い。体も小さく、体重は13～14gが多く、最低体重は10gだった。2015年に確認した産卵巣の一つは、卵数158個、直径3.4cmであった。これほど小さいのは2010年の121個、直径3.3cmに次ぐものだった。その他にも同じ産卵巣の中で直径3.4～4.0cmと、卵径にばらつきがあるものも多い。全体的に近年は直径3.6～3.7cmのものが多くなっている感じを受ける。

専門家?と呼ばれる人たちは必ず「足跡では同一個体が判らない」と言い切る。しかし、こちらでは間違いなく腹甲のコスレの残らない歩き方をする親ガメは、生んだ卵からカワリモノが出現している。そして、2013年の腹甲のコスレの残らない親ガメ



2014年3.4cm卵からふ化した子ガメ
左:肋甲板8枚・椎甲板8枚 右:肋甲板4枚

2013年の産卵日と卵数

平野海岸		双海海岸	
5月25日	136個	5月20日	140個
5月28日	132個	5月28日	153個
5月28日	132個	6月2日	143個
5月31日	144個	6月6日	136個
6月7日	137個	6月14日	146個
6月14日	130個	6月14日	150個
6月25日	137個	6月23日	138個
6月29日	147個	7月2日	137個
7月16日	141個	7月11日	130個
7月16日	132個	7月16日	116個
7月17日	148個	7月17日	131個
8月1日	146個	7月23日	138個
8月14日	135個	7月25日	140個

の産卵日と卵数を参考までに付け加えておく。産卵の日にちが近かったり、重なっているものもあるので、同一個体ではないことがすぐに判る。つまり、複数の変わった母ガメがいると思われる。変わり者が関わるとウミガメまでカワリモノになるようだ。なお、これらは毎年行っている【ウミガメと環境・写真と漂着物展】で資料と共に観てもらっている。



2013年の特徴的な足跡



特徴的な足跡を残した親ガメの産んだ卵から孵化した子ガメ



2015年に確認れた158個、直径3.4cm卵と孵化した子ガメ

三重大学ウミガメ・スナメリ調査保全サークル「かめっぷり」活動紹介

かめっぷり 喜多晃平

三重大学ウミガメ・スナメリ調査保全サークル「かめっぷり」は、2000年6月に設立した学生サークルです。「かめっぷり」は、設立者である石原孝さん（現須磨海浜水族園）や岩本太志さんが名前を考えていた時に、ちょうどエビっぷりをつまみにしていたところから、この名前がついたそうです。

現在は、三重県北中部におけるウミガメの産卵調査やスナメリ漂着死体などを調べています。2015年はアカウミガメの産卵3回を確認しました。ストランディング調査ではアカウミガメ3個体、アオウミガメ1個体スナメリ13個体を確認しました。このように、私たちのフィールドはウミガメの産卵や漂着が少ないのが現状です。この少ない事例も、ウミガメに興味を持たれている方や、私たちの活動を応援してくださる地域住民の方々の情報提供によるところが大きいです。三重という広い地域をカバーするためには地域の方々との交流が大切だと痛感しています。



2015/6/1 三重県津市 町屋海岸にて
アカウミガメの上陸産卵を確認



帰海を見守る、かめっぷりと地域住民

沖縄カメ宴会

黒島研究所 若月 元樹

沖縄では毎年春にカメ屋が集い、新しいシーズンに向けての互いの奮闘を誓い合います。今年は本島北部の大宜味村で開催し、環境省のモニタリングサイト 1000 の沖縄交流会も兼ね、各地からの発表もしてもらい賑わいました。今回は、沖縄県や米軍基地の担当者、さらには在沖米国総領事館の広報文化担当領事も駆けつけるなど、沖縄らしい顔ぶれも集まりました。

今回の会場は、昨年夏に産卵のために上陸したアオウミガメがはねられた国道の近くだったため、宴会の前に、地元で調査をする米須邦夫さんの案内によるまじめな現場検証もしました。懇親会は大宜味村のお隣で、嘉陽宗幸さんのフィールドである国頭村で開催しました。米須邦夫さんが大宜味村の教育長就任、糸満の大度浜で活躍する小林茂夫さんが環境大臣賞を受賞したことを、参加者の全員でお祝いし、夜遅くまで盛り上がりました。

浜を踏査する苦勞を知っている同志の集いはとても楽しいものです。アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの3種が産卵に訪れ、痕跡や産卵場所などのバリエーションがあり、調査が長期におよぶ沖縄では尚更 話題が付きません。交流会では、日本ウミガメ協議会の平手副会長が「産卵“ゼロ”と言い切れるデータの重み」について熱く語ってくれました。浜の環境を見るとき、産卵の数ばかりが注目されますが、産卵がないことも重要です。残念ながら、このことに最もこだわりを持つべき組織の方が全くご理解いただけていないことだけは残念でなりません。



カメがはねられた場所の現場検証



大勢のカメ屋であふれる会場の様子

損保ジャパン CSO ラーニング制度

大阪府立大学 藤田健登

私は日本ウミガメ協議会で8カ月間インターンをさせていただきました。主に大阪事務局での事務作業、和歌山県みなべ町千里浜でのウミガメ産卵および子ガメの孵化・脱出調査に携わりました。どの活動もはじめての体験で、非常に有意義な時間となりました。みなべでの調査では、地域の方々が毎日のように調査地に来て下さり、一緒に調査に参加して下さいたり、食べ物をおすそ分けしに来て下さったりと、地域の方々との強いつながりを感じました。また、フィールドワークと事務作業という二つの異なる仕事を体験することで、組織を運営するディスクワークの大切さを理解し、ウミガメに関わる地域活動にも興味湧いてきました。まだまだ浅学非才の身なので、これからも継続的にウミガメの勉強に励もうと思います。これからは、インターン生としてではなく、地域の方々が毎日来てくださったようにボランティアとして、ウミガメの保護・保全活動に携わっていきたく考えています。



ご寄付を頂いた方々 2015年10月1日～2016年3月7日

奥田恭子、シャディ(株)、南知多ビーチランド、四国コココーラボトリング(道の駅日和佐・かめたろう)、ライオン(株)、床田直美、松平陽子、沖縄サットサンヨガ、ヤフー(株)、(株)阪急百貨店、前田直美、串本海中公園センター、玉岡昇治、サンセットビーチハウス ペイン ルミ、橋爪真璃子、ギフコ株式会社、小野悦子、金井澄、和田素子、丸吉日新堂印刷株式会社、公益財団法人パブリックリソース財団、岩本貴美子、一般財団法人H2Oサンタ、置鮎純子

この他にも、黒島研究所、第26回日本ウミガメ会議でご寄付をいただいた皆様、本当にありがとうございました。

(順不同・敬称略)

うみがめニュースレターのご案内

うみがめニュースレター(以下UNL)という雑誌をご存じでしょうか? UNLはウミガメにまつわることを分野に関係なく集めた総合情報誌で、よりディープなウミガメの世界を垣間見ることができます。さらに、専門知識がなくても分かるように、という方針で編集されていますので、一般の学術書よりもかなり読みやすくなっています。発行は年4回で、うみがめニュースレター編集委員会が行っており、日本ウミガメ協議会ではこれを支援しています。バックナンバーは日本ウミガメ協議会のHP (http://www.umigame.org/J1/katsudou_newsletter.html) からすべてご覧いただけます。また、ウミガメ速報をメールで受信されているSTSメンバーを対象に、今後は最新号のダウンロードURLをメールでもご案内していく予定です。

しかしながら財政状況は厳しく、発行を継続していくため、皆様からの温かいご寄付をお待ちしております。また、切手の寄付も大歓迎ですし、協賛広告も併せて募集中です。詳細はメールで newsletter@umigame.org までお問い合わせ下さい。

Seaturtle goods shop 人気! うみがめの世界 手拭い☆



当会スタッフがデザインしたオリジナル手ぬぐいできました。手ぬぐいにはアカウミガメを中心とした海の生き物たちが描かれています。流れ出る汗をぬぐうのもよし、ちょっとしたウミガメの説明に使うもよし、夏のお供にはおすすめの一品です。

■864円 ■色 白地×紺 ■解説付き

インターネットでお買い物

うみがめグッズがインターネットショップからご購入いただけます。オリジナルグッズのご購入はもちろん、会費のお支払いやご寄付にもご利用いただけます。お支払いは代引き、各種クレジット、ネットバンキング、当会イーバンク口座等からお選びいただけます。

アクセスはこちら!

<http://seaturtle.shop-pro.jp>

◆ STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートして下さるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで、自然が好きな方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非入会をお誘い下さい。

入会金:なし
年会費:個人会員3,000円、学生会員1,000円
団体会員10,000円、特別会員100,000円
会員特典:オリジナル会員証&グッズ、機関誌

seaturtle goods shopからもご入会いただけます。詳細は下記サイトへアクセスしてください。

<http://seaturtle.shop-pro.jp>



◆ STSmembers更新手続きについて

会員更新の書類は会員期限終了月に送付させていただきます。会員の皆様のご支援で、ウミガメやそれを取り巻く環境を保全してゆくことができます。更新月を迎えられる会員の皆様は、是非とも更新して頂ければ幸いです。今後とも当会をよろしくお願い致します。なお、すでにご登録いただいている内容に変更がございましたら当会までご一報ください。

編 集 後 記

2015年は「ダーウィンが来た!」でのオサガメ特集の放送にはじまり、毎年好評をいただいている「Blue Ocean Project」のコラボTシャツの販売と、商品をご購入された方の中から、和歌山県みなべ町での「ウミガメ保護体験ツアー」へのご招待や、日和佐うみがめ博物館カレッタの30周年を記念して日和佐公民館にて「うみがめの楽しいシンポジウム」の開催等、様々なイベントで温かいご支援をいただき感謝しております。そして第26回日本ウミガメ会議(一宮会議)ではたくさんの方々にご参加いただき充実した一年になりました。これからもウミガメの調査・研究、イベント出展、体験ツアーや会議の開催等、ますます活動の場を広げていきますので、よろしくお願いいたします。

デザイン担当:宮原尚子

マリンタートラー(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2016年4月30日
発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

電話:072-864-0335 Fax:072-864-0535

URL <http://www.umigame.org> E-mail info@umigame.org

